

## 会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和4年度 第2回社会教育委員会議定例会		
事務局 (担当課)	生涯学習部生涯学習課 電話042-769-8286 (直通)		
開催日時	令和4年7月27日(水) 午後5時～午後7時		
開催場所	相模原市役所第2別館3階 第3委員会室		
出席者	委員	14人(別紙のとおり)	
	その他	0人(別紙のとおり)	
	事務局	8人(生涯学習課長、他7人)	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	0人
公開不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1 あいさつ  2 議題 (1) 研究調査の柱について (2) アンケート調査・ヒアリング調査について  3 その他 (1) 図書館協議会への派遣について (2) 報告事項 (3) 神奈川県社会教育委員連絡協議会研修会について		

## 議 事 の 要 旨

### 1 生涯学習課長あいさつ

生涯学習課長の進行により、開会のあいさつを行った。

### 2 古矢議長あいさつ

古矢議長があいさつを行った。

### 3 議題

古矢議長の進行により議事が進められた。

#### (1) 研究調査の柱について

主な意見は次のとおり。

(小林委員) 柱となるものは大きく4つくらいに分かれると思う。1つ目は「子どもの参加と世代間交流」、2つ目は「人材育成、人材の発掘、人材の活用、リソース化、大人の学び」、3つ目は「場所づくり、居場所づくり、仕組みづくり」、4つ目は「事例などを情報収集し、ネットワークにより共有」。情報収集は、子どもの参画、人材育成、居場所・仕組みづくりの中に入るか、前提を支える基盤になるのではないか。この4つから柱を論議することとなる。

(秦野委員) 皆様の意見を整理してまとめ案を作成してみた。柱を①仕組みと学ぶ機会、②場所と学ぶ機会というようにそれぞれセットにすると、3つの柱になる。小林委員から意見のあった情報については、それぞれの柱の中に市内外の取組事例を入れていく、あるいは、特に情報を必要とする柱に入れたら良いと考える。

(水谷委員) 秦野委員の意見のとおりで良いと思うが、少し具体的な話として、「定年退職後の人材の再教育」を3本柱の中にぜひ入れてほしい。私自身も定年後にサークルに4つほど入ったが、初心者教室に行くと女性が多く、男性が定年になってから社会や地域に再デビューするという教育がない。男性に限らず会社人生の長い方にとっては会社というコミュニティとは別の地域コミュニティに入ることは敷居が高いため、敷居が低くなるようサークル等の参加への道筋をつける仕組みが公民館にあれば、そこからコミュニティが広がり、知り合いも増えていくと思う。

(議長) まとめ案について先程説明された内容を少し補足していただきたい。

(秦野委員) 子どもは沢山の力を持っているため、大人から教わり守られるだけではなく、子どもの可能性や力を引き出したり、実体験や達成感を持たせてあげるなど、大人がお膳立てした範囲で何かに取り組むのではなく、子どもが主役となり主体的にできるようなチャレンジをさせてあげたいとい

う意見が皆様からあったため、場所と機会づくりの後に、キーワードとして並べた。

これを整理して提言を作っていくときに、そういうキーワードをうまく混ぜながら入れると良いと思っている。抜け落ちているキーワードなどがあれば、意見をいただけるとありがたい。

また、機会や場所だけつくっても、大人が必要以上に手を貸してしまったり、「こんなこともできないのか」と子どもに言ってしまったり、子どもの可能性をつぶしてしまう大人も時々おり、子どもに関する専門的な仕事をしている方ほど、多様な子どもがいることを知らないこともあるため、どうしたら子どもが持っている可能性を引き出して花開かせられるか、それらを理解する学びの場がもっとあると良い。若林委員が関わる活動の中で、子どもの多様性を理解し支える方々が育っているため、学びの機会をつくれるのではないかと思う。「大人を育てる」ことはとても大事であるためキーワードに入れてみた。

「多世代」と「子ども」を分けた理由としては、世代間交流の場では、やはり大人が強くなってしまうことと、多くの大人がいる中に入っていくことがプレッシャーとなる子どもがいると考えたためである。「多世代多様」というのは、幼い子どもから高齢者までという多世代と、多様な文化・特性を持つ方々のことである。

「公民館の新しい利用法」というのは、例えば、3回の連続講座には行けないが30分だけなら参加できる、気軽に立ち寄れるよう使っていない時間帯の学習室を定期的に開放するようなことを、昔公民館は「地域の茶の間」といわれていたように自由な使い方ができたら良いという意見もあったため、それらのことが新しい利用法の中に込められている。これが単発的に1年1回ではなく、継続的・発展的になると良いと思いキーワードに入れた。そのような場が、それぞれにとって居心地良い場にするためには、人権の学び、多様な文化・特性を持っている方とのコミュニケーションスキルを大人が学ばなければならない。さらに、本市は外国に縁のある子どもが沢山いるため多文化理解について学ぶ機会が必要であり、その場をつくるのは自分達であるという当事者意識、気付きを生かしていくような学び方も入れたい。

だから、3本目の人財の「ざい」は「財＝たから」、使われる「材料」ではなく「人は宝」という宝をより磨いて輝かせる。会社人間だった方も会社で学んだことは素晴らしいスキルであり、少しプラスアルファがあると地域に生かせることにつながっていくため、色々な主体と連携したり、学んで活動してまた学んでという循環の仕組みをつくれたら良い。これは国も

推進していることであり、平成24年に社会教育法に追加された事項であるため、この仕組みをつくっていったら良いと思い、キーワードとして「ネットワーク」、「人財のリソース化」、「コーディネート」、「大学」、「情報の共有」を入れた。

水谷委員から意見があったように、退職後の大人はずっと会社に勤めていたため地域のことを何も知らない、男性に限らず女性も地域の集まりに入りにくい場合もあるため、2本目と3本目の両方に入ると思った。それぞれが持っている経験をスキルアップすると地域で役立つスキルになったり、コミュニティを支える側に回ってみたり、多様な人が行きやすい学習機会にも入ると思うが、皆様にも意見いただきたい。それから大人になっても新しい知識を得ることはとても楽しいということをどこかに入れられると良い。

また、市内の取組事例や他自治体の取組事例も色々あるため、それらをそれぞれの柱の中に入れていくと良いと考える。

議論の材料になったら良いと思い、まとめ案を作成してきた。この案で進めていくということではないため、ぜひ皆様に議論いただきたい。

(議長) 私も、この3本の柱について全く同感である。

唯一異なっていたこととして、人権についてはもう1本柱を立てると考えていたが、秦野委員から、3本の柱の中に入れて少し強調するような形でまとめてはどうかという考えが示された。

1本目の柱は「子ども・若者を支え、生かす機会と場づくり」、2本目は「多世代、多様な人たちにより開かれた居場所づくりと学びづくり」、3本目は「人財を輝かせる仕組みづくりと学びの機会づくり」とまとめられている。このことについて意見があれば、付け加えていただきたい。

(大橋委員) 1本目の子ども・若者の中に大人を入れないことは、現場に立っていて強く感じることである。

例えば、子どもセンターの祭りなどに地域の方々は熱心に携わってくれているが、少しやんちゃな男の子を頭ごなしに怒ってしまうことがある。しかし、その子の背景には、家庭のことなどの色々な事情があり、それらの理解が足りないことで折角の楽しい場が損なわれてしまう。そういう場に関わる大人は、多様性等の学びを終えてから携わっていかないと世代間交流の目的は損なわれてしまう。

(議長) 小泉勇委員は、地域人材をどう活用するか、人が集まれる場所等について意見を挙げていたが、いかがか。

(小泉勇委員) 私が考えていたことは概ね盛り込まれているが、現代社会を見つめたときにキーワードとなるものがいくつかあると考える。

小学校でも SDGs や Society5.0 について取り上げており、現代にマッチするような取組も柱に入れるとすれば、2 本目の柱にキーワードとして入れられないか。現代社会の中で大事なことや取り組みたいことも視点として入れても良いと思う。

(議長) 現在に生きる社会としての視点は、頭の片隅に入れておきたい。

(秦野委員) 3 本目の柱に「現代的な課題への知識」が入っているが、2 本目の柱にも多様性や人権のことを入れておかなければならない。また SDGs に関しては3本の柱それぞれに目標が入ってくるのではないか。

(議長) どういう形でまとめていくかは今後の議論となるが、非常に大事な視点であるため、しっかりと押さえて丁寧に語りたい。

(小泉喜亮委員) 3本の柱の内の2本にある機会、場づくり、居場所づくりを1つにまとめられると思う。また、3本目にあるコーディネートという部分はこれから先の社会に重要なものである。

先日文部科学省から下された土日の中学校部活動の民間委託の件も含めると、コミュニティ・スクールなどにも通じることであり、人財のコーディネートに関して今後早急に必要となる課題と感ずるため、3本目の「人財をより輝かせる仕組みづくりと学びの機会づくり」をもう少しコーディネートして発信していくとイメージした方がわかりやすく、「機会」よりも「循環」の言葉を使った方がより分かりやすくなると思う。

土日の中学校部活動の民間委託は、教員の負担軽減のために民間委託するというイメージがあるが、実はそういうことではなく、子どもの土日の使い方を改めて考えるものである。例えば、平日はサッカー部に所属する子どもが土日は野球にチャレンジしてみたり、平日は野球部・バレー部に所属する子どもが土日は地域の公民館の将棋教室に参加してみたりというようなニュアンスが込められている。そのようなニュアンスが込められているのであれば、これから先、地域の核である公民館が、高齢者が子どもに将棋等を教える場になっていく予感がある。それに向けて、地域に埋もれている人財のコーディネートを3本目の柱にしっかりと立てるとすっきりするのではないか。

(石川委員) 最近、マイナス面を予防するよりも、その人の強みや特性等のポジティブ面を伸ばす考え方が重要視されているため、その考え方が子ども達の場づくりなどで使えると良い。

先程の SDGs のところで、「Sustainable wellbeing」継続的な幸せということも少し考えてみることで、みんなが今この瞬間、または今後の幸せをつくり出していく場になると良い。

先程文化という言葉が出たように、世界の様々な情報が入ってくる現代に

において、地域も大事ではあるが、世界に目を向けるような提言もできると良い。

そのほかに、ライフステージが変わる際は誰もが戸惑いを感じるため、ライフステージの変化に対応した体験ができると良い。例えば、子育ての前段階から子どもについて知ることや定年退職前に退職後の生活を知ることができる。具体的な事例では、私の勤める大学の院生が行っているベビ体操では、子どもがいる保護者ではなく小学生や高校生もぬいぐるみやバスタオルなどを使って体験できる。この事例のように、自分が次の世代に移っていくイメージや体験ができると良い。1つの世代だけでなく次の世代をイメージできる関わりも、柱に取り入れられるのではないか。

(雨宮委員) 3本目の「現代的な課題への知識を継続的に学ぶ機会づくり」は、私が若者と関わる中で感じることもあり、大人は現在の若者世代に何が起きているのかしっかり学ばなければならない。なぜ働かない若者が多いのか。「怠け者である、努力が足りない。」という次元ではないことを前提に考えなければ、社会問題は何も解決しないと感じる。部活の民間委託等には様々な側面があると思うが、段々学校教育が民間に切り出されていくことで、学校とは何をすところであるか疑問を感じる。Society5.0ではないが、経済的な思惑が感じられる中でこのような動きはいかがなものか。地域の方の活躍する場が学校と共存していくという良い面も沢山あると思うが、メディアなどの世間の大きな流れに乗るだけでは危険であると考ええる。

順調に大学までの道筋を進んだ方は働くイメージを持つことができると思うが、そうでない若者は働く意義が分からず、生きるために働いて収入を得なければならないということが理解できない。しかし、本来の働く意義はそういうことではなく、生きがいや居場所であることを含んでいると思うが、そのような価値観がなくなりつつあることを日々感じる。経済的に成功している話ではなく、働くことの喜びについて語ってくれる大人と若者が出会えると良い。

(議長) 秦野委員から提示された3本の柱は、大きな流れの本流としては良いと思うが、先程いくつか意見いただいた、例えば現代的な課題をどう捉えていくか、Sustainable wellbeingやSDGsの問題、次のライフステージにつなげていく視点、それらを入れると多少理解が難しくなる。これは柱の上に少し解説を載せるような形で書き、その考えを念頭に3本の柱でこれから進めていくつくりにはどうかと考えるが、いかがか。

非常に大事なところであるが、小泉喜亮委員からの意見であったコーディネートをとどのように取り入れていくか、それを落ち着けることによって3

本の柱が生き生きと力強いものになっていくと考える。

秦野委員に確認したいが、「子ども・若者を支え活かす機会と場づくり」の「場づくり」は、「働きかけ」と「物理的な場」どちらの意味合いか。

(秦野委員) 1本目の「場所」と「居場所」を使い分けているのは、「場所」はスペースの意味が、「居場所」の中に「機会」の意味を込めているためであるが、通じにくければ変えても良い。2本目の「居場所」は居心地よく、自分の力を発揮できる、行ったら楽しいスペースという、居心地よさも含めた居場所にまとめているため、1本目とは使い分けている。このあたりは皆様が共通理解できる言葉に直しても良いと思う。

(議長) 3本目の柱「循環」について小泉喜亮委員から意見があったが、それをうまく反映できるか、それとも本審議会の概念として「多様な主体との連携、学びと活動との循環等の仕組みづくり」に落ち着いた方が良いのか。コーディネートは、元々公民館が持つ機能あるいは役割であるが、浮かび上がらせるべきか。コーディネートという言葉を決めると大体柱が固まると思うが、いかがか。

(海野委員) 秦野委員のまとめ案は、議長が言うとおりに、これらのことが大きく定義に流れていると共通理解できていれば良いと思う。

先日陶芸教室に参加して感じたこととして、公民館等のイベントや展示会に1人で行く人、親子で行く人、近所の方と行く人、同じ趣味を持つ者同士で行く人など、どのような人の集合体で行くか、それが魅力あるものになるにつなげていく必要があると思っており、これからの研究の中で考えていければ良い。

(若林委員) コーディネートする方はとても大切である。多様な特性を持っている子どもが増えているため全市的に理解が広がれば、子どもを頭ごなしに怒るということはなくなると思う。

発達特性の色々な課題は子どもだけでなく大人も持っている。コーディネートするには、自分を理解することで他者が分かることもあるため、そのような学びが公民館でできることによって、人財をより輝かせていけるようにコーディネートしながら育てていけるのではないか。

2本目の居場所に世代間交流があったが、地域には子育てに悩み孤立している方も増えており、ずっと子育てに悩み不安を抱える親に育てられると子どもも不安定になっていく。その状況が長く続くことは子どもの成長過程に悪影響を及ぼし、不登校や引きこもりにつながる。それが様々な事件の背景にあると聞くことも多い。フィンランドではネウボラという支援制度があり、不安定になる妊娠期からしっかりサポートが入っている。孤立させないためには親支援が必要であり、そのような支援が地域の公民館で

できるかわからないが、地域・公民館で支えられると親の気持ちが安定し、より良い子育てにつながっていくのではないか。親を支えるプログラムができるとうい。

(安西委員) まとめ案の方向性で良いと思うが、それを実際に具体化するにあたって、公民館が有料化している中、自由に公民館を使って集まれる場をつくるためには、公民館主催のイベント等にしなければ実現できないのではないかと懸念がある。居場所のない方がふらりと公民館に立ち寄り体験できることは考え方としては良いと思うが、現実的に今の状況では実現できないのではないかと。

(議長) 公民館職員へヒアリング調査を実施する際に、その点について聞いてみても良いと思う。

(金子委員) まとめ案について特段意見はない。

少し話は逸れるが、これまでの会議での意見を聞いてきた中で、私にも何かできることはないかと思ひ、私が所属する文化協会で、今年は市民会館で「未来の文化を担う子ども達」を1つのテーマとして、文化協会で活動する子ども達が、大きな舞台で子ども自身が主役となれる機会を設ける予定である。その経験が子どもの将来の何かのきっかけになればと良い。

近頃マナーの悪い大人が多いように感じるが、まとめ案のような学びの場があれば、人は環境によって変わるため、周囲に感化されて大人のマナーが良くなると思う。また、子どもは大人の背中を見て育つため、マナーの良い大人が増えることで子どもも学ぶことがあるのではないかと。

(副議長) 7月20日から子どもは夏休み期間に入り、公民館では子どもが楽しめる事業を企画し、小学校等を通じてお知らせをしたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、子どもがほとんど来ない状況である。新型コロナウイルス感染症が収まり、沢山の子どもが訪れる公民館になれば良い。

私が館長を勤める公民館では、毎週木曜日に「囲碁の日」を開催しており、先週、障害のある高校生が友達を連れてふらりと立ち寄ってくれた。このように、公民館は子どもがふらりと立ち寄って楽しめるような場にしたい。公民館現場の立場としては、公民館職員がコーディネートする力をつけていくことがとても重要であると思っている。職員が育ち、地域の人々が育つことが重要ではないかと。

(議長) 3つの柱を基本としてよろしいか。ただし、意見のあった「コーディネート」「連携」「ライフステージが変わる中での学びの活動をどう循環するか」については、もう少し検討したい。

また、「SDGs」「現代的な課題」「Sustainable wellbeing」等の意見については、物事には必ず上位概念と下位概念があり、これらは上位概念にあた

と思う。いずれ研究調査をまとめていく時には、これらを上冠してしっかり考えて進めていきたいと思うが、いかがか。

(全委員) 承認

## (2) アンケート調査・ヒアリング調査について

(秦野委員) 資料 2-1 は、「公民館を使ったことがない人」、「公民館がどういう所か知らない人」、「建物があることは知っているがどんな所か知らない人」に向けて「なぜ来られないのか」、「なぜ敷居が高いと感じるのか」等を問い、社会教育委員会議として理解するためのアンケート調査として実施し、定期的に市が実施している調査に設問項目を追加するのではなく、研究調査の柱に直結するアンケート調査をコンセプトにした。

タイトルは未定であるが、例えば「相模原市の公民館についてのアンケート調査」というタイトルにすると、回答者に「公民館はよく知らないから自分は答えるものではない」という先入観を持たれてしまうため、タイトルには公民館を入れず、公民館に関する設問は調査票の最後に設けたい。

事業内容に関する設問については、小委員会で議論した具体的な事業内容を羅列しているが、相当数挙がったため複数回答とした。

事業形態に関する設問については、公民館を使ったことがない学生に話を聞いてみたところ、形態がネックになっていることが分かった。働きながら学んでいる学生からは、一覧をみただけで「ここは私が行くところじゃないと思った」「行ける時間帯には何もやっていない」という声が挙がったため、どのような事業形態なら参加できるかを聞くために「同じ内容を異なる日時、曜日に開催していて選ぶことができる」等の選択肢を設けた。情報を得る媒体に関する設問については、自治体ホームページを見る人は少ないと予想されることから、どのような媒体をよく見ているか知るために設けた。本市には TickTock を情報発信媒体に使っている施設はないが、実態を把握するためにも選択肢に挙げている。

情報に関する設問については、どのような情報があると公民館に行ってみようという気になるか問うための設問である。学生に聞いたところ、情報が沢山あったほうが行きやすいという意見があったため、どのような情報があると良いのか皆様から意見をいただき選択肢を増やしたい。

そして最後の設問で、公民館の認知度について問う構成とした。

なお、フェイスシートについては今回の議論から外している。

(議長) コンセプトは「公民館を利用したことがないあなたにぜひ答えてほしいアンケート調査」だが、タイトルが決まっていない。事業内容は多項目に及んでいる。骨組みは秦野委員長が作ったがまとめた方が良いという意見も

あったため、タイトルは最後にして事業内容の選択肢について意見を伺いたい。

(雨宮委員) 選択肢の最後は自由記述か。

(秦野委員) 本日議論した項目を追加するという意図だが、自由記述を設けることを妨げるものではない。

(雨宮委員) 自由記述を設けた方が良い。

(石川委員) 選択肢が多く、1つ1つの文章も長いため、全部読んでもらえるか心配である。自由記述は私達が考えもしなかった回答が期待できるため設けた方が良いと考える。

また、参加費について選択肢を追加してはどうか。「無料なら参加したい」、「参加するまたは主催するとポイントが付く」というような方法でも良いと思う。

(大谷委員) 文章が長いという意見があったが、短い方が回答しやすいと思う。

(金子委員) 若者には短い文章が良いかも知れないが、1つ1つが興味を引く内容であり、短くすると事業内容が想像しにくくなるため、短くする必要はないと考える。

(議長) 同じような選択肢を5つぐらいにまとめて区切り、分かりやすいようにすると答えやすいのではないか。

(小泉喜委員) 「音楽・美術」と「楽器」で選択肢が分かれているが、音楽でまとめる、スポーツでまとめるなど、ジャンル分けをすると見やすいと思う。

(秦野委員) 曲を作ったり絵を描いたり1つの作品を創ることと、楽器に触れたり作ったりすることは趣が違うという視点で選択肢を分けているが、ジャンルでまとめるという方法もあると思う。

(金子委員) 音楽であれば、「作品を創る」、「楽器に触れる」で分けられる。

(議長) 事業形態について、補足説明をお願いしたい。

(秦野委員) 「何故公民館に行かないのか」という問いの答えの裏返しとなる設問として、また、研究調査の柱につながるものとして設けた設問である。

安西委員が書いていた意見のとおり「自由に行けるようにするには公民館主催でなければ行けない」ということもあるため、公民館主催の講座を2時間実施するというのではなく、2時間の中で30分講習を4回実施してふらりと行っても参加できるなど、研究調査の柱とリンクさせている。中々時間が取れない方にはオンデマンドで好きな時に参加できるようにするか、申込不要であれば「今日行ってみようかな」と思う方がいるかも知れないなど、どうすれば行きやすいと思ってもらえるかを挙げてみたが、アイデアがあればもっと選択肢を増やしたい。

(議長) とても考えて作り込まれているが、皆様の意見はいかがか。情報を得る媒

体、情報の内容、認知・利用状況について意見はあるか。

(金子委員) 情報を得る媒体についても関わると思うが、You Tube など良いと思う。作品の完成例や作った曲を You Tube で視聴できるようにすれば、「これなら自分でも参加できる」と思ってもらえることもある。

自治体職員が少し面白いことを実施すると非常に好評となった事例もあるため、親しみを持つという視点であれば You Tube を使って楽しくやっているところを配信しても良いのではないか。

(議長) 最初の調査票作成の考え方について意見を伺う。

(大橋委員) コンセプトの「公民館を利用したことのないあなたにぜひ答えてほしいアンケート調査」をそのままタイトルにしても良いと思う。

(若林委員) このタイトルの方が学生にも答えてもらえるのではないか。

(石川委員) 公民館を使ったことがない人だけが対象であれば非常に良いと思うが、公民館を使ったことがある人には答えてもらえないのではないか。何らかの工夫が必要である。

情報を得る媒体については、「情報を得ていますか」という問い掛けだと現に情報を取得している人しか答えられない。「どのような方法で発信すると情報を得やすいですか」にしてはどうか。

(議長) 「調査票作成の考え方」は今後検討するとして、設問項目等は小委員会提案事項のとおり進め、小委員会でまとめるということによろしいか。

(全委員) 承認

(水谷委員) 「公民館を利用したことのないあなたにぜひ答えてほしいアンケート調査」を「公民館を利用したことのないあなたにもぜひ答えてほしいアンケート調査」にしてはどうか。

事務局から、資料 2-2、2-3 について説明を行った。

(議長) 資料 2-2、2-3 について意見を伺う。

(金子委員) アンケート調査の周知方法について、資料にある「大学への配架等」とはどのような方法か。

(事務局) 例えば、大学でのチラシ配架や大学ホームページへの掲載等が想定されるが、大学等との調整次第であるため必ず実施できるかはわからない。

(金子委員) 公民館を利用していない若者は、市や公民館のホームページを見ることがないため、効果的な周知方法としては、大学の先生に協力を依頼して講義前に周知してもらい、先生が持つグループ LINE などを利用して学生に回答を送ってもらってはどうか。

(秦野委員) 良いアイデアだと思う。

もう 1 つ、委員全員で協力して行うこととして、アンケート調査の QR コードを紙片にプリントしたチラシを事務局に作ってもらい、私達委員もその

チラシを持ち、日頃の活動で関わる方等に「ちょっとアンケート調査をやってみないか」と配れたら良いと思うが、いかがか。

(議長) 資料 2-2 には QR コード設定を織り込んだスケジュールが記載されており、大分期間が差し迫っているところである。

(石川委員) アンケート調査は Web での実施となると、Web が使える人に限定したアンケート調査でになってしまう。例えば、Web を上手く使えない人をサポートするような手立ては考えているか。それとも若者に限定したアンケート調査ということか。

(秦野委員) 若者に限定したものではない。

(石川委員) 働き世代の方、定年退職後の方、子育て中の方のほか、中学生や高校生にもアンケート調査をしても良いと思ったが、回答の多くが「勉強を教えてください」となるかもしれない。

(若林委員) 生涯学習課が主催する発達サポート講座では、第 3 期受講者の募集を広報さがみはら等を通じて行った。しかし、小学校の保護者に募集していることの認知度について確認したところ「知らない」「広報さがみはらを見てない」「知っていたなら申し込みしたかった」との回答が返ってきた。現在新聞を取らない世帯は多く、区役所等で広報さがみはらは配布されてはいるが、1 番受講してほしい保護者に届いていないことが忸怩たる思いであった。

このアンケート調査についても、市ホームページを毎日チェックする方が少ないと思われる中、幼稚園児や小学生の保護者などの公民館に関わってもらいたい世代にどのように告知するか。関わってほしい世代、公民館を利用してほしい世代にアンケート調査をどのように告知するかということは、本調査に限らず他の事業でも非常に難題であると思う。

(大橋委員) 若林委員の話はとても衝撃的であり、柱の「子ども・若者を支え」や「多世代多様な人」のところをぜひ届けたいと思う。

「子ども」であれば、各地域にある子どもセンターにチラシを配れば、子育て広場に来る乳幼児子育て世帯には届くと思う。「多世代多様な」であれば、淵野辺に国際交流ラウンジがあるため、障がいのある方や外国の方にも届く。色々な人に公民館を知ってもらい、公民館に来てもらいたい。

(若林委員) 学校に周知をお願いしてはどうか。

(金子委員) PTA で周知してはどうか。

(小泉喜亮委員) PTA 加入者は生徒の保護者であり、学校からの周知と重複する。

(秦野委員) 石川委員から意見のあった「QR コードが手元に届いても、どうやって答えたら良いかわからない高齢者等」はどうするか。

(石川委員) 小学校・中学校・高校の生徒とその保護者は回答できそうだが、もう

少し上の世代はどうするか。

(金子委員) 公民館に行ってもらえるのはどうか。

(石川委員) それが一番良いと思うが、それでは既に公民館を利用したことがある人に限られてしまう。公民館に来ない高齢者にも答えてもらうためには、どこにチラシを配れば良いか。

(大橋委員) 老人会はいかがか。

(議長) 老人会のほかに自治会もどうか。

(石川委員) 高齢者の回答をサポートできるよう、世話人の方に教えておいてはどうか。そこで高齢者と世話人とのコミュニケーションが生まれると良い。

(議長) 方法は工夫していきたい。

他に意見がなければ、次のヒアリング調査に協議を移りたい。秦野委員長から資料3の説明をお願いしたい。

(秦野委員) 公民館職員がどのように考えているかということヒアリング調査することは決まっているが、私達が設定した柱に対して、現場の公民館職員の方々がそれを具体化していくためにどのようなことで悩んでいるか聞き取りたいということが調査の主旨である。

調査形式をどうしたら良いか意見を伺いたい。例えば個別で聞いた方が良いか、あるいは座談会形式で聞いた方が良いかということである。また、調査を実施する単位について、全公民館に聞くのか、あるいはブロックごとに数館に来てもらい聞くのか、単位も色々ある。この辺りについて意見をいただきたい。

小委員会委員だけではヒアリング調査を実施することはとても難しいため、社会教育委員全員に何かしら受け持ってもらいたい。自分が話を聞くならどうしたら良いかという視点で意見をいただきたい。

また、小委員会で出た意見として、座談会では他の職員に遠慮して意見を言いづらくなってしまふかもしれないことを危惧している。

(議長) 小委員会で、時間帯の問題についても意見があった。公民館の開館時間中は窓口対応等があるため全ての職員に話を聞くことは難しい。

資料の太枠で囲っている調査内容、調査形式、実施単位について皆様からよく意見をいただきたいという秦野委員長の考えだが、いかがか。

(金子委員) 私達全員がインタビューするということだが、聞き取り内容のたたき台はあるか。やはり他の職員に遠慮して話せないことが大半であると思うため、個別の方が良いと考える。

(議長) 現時点ではたたき台は作れていないが、調査を実施する際にはたたき台を基に聞き取りしてもらふ予定である。

先程の説明で、調査は委員全員で行うということであったが、実施単位は

どうするか。32館単体、区単位、全体か、32館全てに聞き取りを行うことは難しく、一番動きやすいのは区単位かと思うが、いかがか。

(秦野委員) ブロックはいくつに分かれているか。

(事務局) 中央区、緑区、南区の3つの区に分かれている。

(金子委員) 区単位で区内公民館の全職員が一同に集まるということか。そうすると大変な作業となる。

(石川委員) 現実的には日程調整など非常に難しい。区内の全ての公民館が集まるには、グループで分けてディスカッションしていく方法が良いと思うが、スケジューリングが大変である。全館、全職員に聞き取るか、ランダムサンプリングでいくつかピックアップして個別に職員に聞き取りを行う方法もある。1つの公民館に職員は何人いるか。

(大谷委員) 館長1人、館長代理1人、任期付短時間勤務職員3人、合わせて5人いる。

(石川委員) 全員に話を聞くか難しいところである。

(金子委員) 館長と館長代理は、別日に分けた方が良いのではないか。

(小泉勇委員) 事務局に質問するが、例えば区単位で集めるとした場合、時間帯の想定はあるか、実現可能か。

(事務局) 例えば、業務に支障がないよう考慮し、まず館長代理だけが3人集まる日、職員だけが集まる日というように、日を分ける方法が現実的であると考える。

また、単館に赴きヒアリング調査をすることは日頃事務局で行っており、その際は午前中にA館、午後にB館というようにスケジュール調整すれば、館毎に訪問して聞き取りをすることは可能と考える。

(金子委員) 市内にはいくつ公民館があるか。

(議長) 32館あるが、その辺は経験豊富な事務局に相談するとして、どのような方法が一番良いか決めたい。

(事務局) サンプルをどのくらい取りたいかが大切であり、もし全体の声が聞きたい場合には1月という期間では難しいため、資料にある3択だけではなく、例えば各区から1館ずつ選び、どこの館であれば良いサンプルが取れそうかということは相談できる。あくまで一例であるが、方向性を出してもらえると事務局としても調整がしやすい。

(石川委員) 1人で1館を担当するのか。

(事務局) 基本的にはペアを組むという話が小委員会に出ていた。例えば3人1組とするか、2人1組とするかは皆様で協議して決めていただきたい。

(議長) 14人を2人ペアとした場合7組できる。

(秦野委員) 皆様は日頃の活動もあり、全部に聞き取りを行うことは現実的にでき

ないと考える。7組に合わせて、サンプル調査する方法が良いと思う。各区で館長、代理、職員にそれぞれ聞き取りすると9つになってしまうため、館長何名、代理何名、職員何名のように7組で割り振れるよう調整したい。以前配布された公民館資料から、どの館がどのようなことに取り組んでいるか見えてくるため、私達が柱にしたところに講座内容があまり合致しない館に対して、なぜできないか、何が難しいかということ聞きに行くというような選び方をしても良いのではないか。アンケート調査も公民館に来ない方を対象とした内容であるため、ヒアリング調査も公民館職員は何が難しくてできないのかということ聞いてみたいと、個人的な意見として思っている。

(議長) 様相が複雑であり、少し整理をしないと即答できない。

基本2人ペアでスケジュールを合わせ、ヒアリング調査に臨むということは皆様了承していただけるか。何館に聞くか、どの立場の方に聞くかは、公民館の業務時間的な問題もあるため、少し考える必要がある。

1番大事である職員に聞き取りする内容はまだ白紙の状態であるため、その辺も含めて小委員会に一任していただくとありがたい。小委員会で協議した内容については、後日皆様に共有するというところでいかがか。

ヒアリング調査の開始時期はいつ頃にするか。実施時期によっては今後の動きが変わってくると思うが、いかがか。

(事務局) ヒアリング調査時期は、アンケート調査と同様に10月を想定している。

(議長) 10月に実施する場合、質問項目の検討、対象館や対象者の選定、チーム編成等、非常に厳しいスケジュールとなる。

(事務局) 以前の会議でお示しした今期スケジュールでは、11月の第3回定例会で調査結果を報告する予定であるため、調査の実施時期を10月としたところである。しかし、協議の結果、ヒアリング調査の内容をしっかりと協議するためにスケジュールを後ろに倒すという意見であれば、スケジュールを変更することは差し支えない。

(小泉勇委員) 定例会の回数を増やすことは難しいと思うが、第3回定例会を経なければヒアリング調査を実施できないと思うため、スケジュールは少し調整した方が良い。ペアや日程の調整は、委員同士顔合わせしないと難しく、共有できない。アンケート調査は先に実施したとしても、ヒアリング調査はもう1度集まるべきである。

(議長) 小泉勇委員の言うとおりに、真っ新たな状態で議論をしているため、もう少し小委員会で組み直して、それから皆様に意見を伺い、場合によってはスケジュールを後ろに下げてヒアリング調査を実施するというところで本日のところは、小委員会に一任いただいでよろしいか。

(秦野委員) 提案いただいたとおり、11月の第3回定例会では、アンケート調査の結果と本日概ね決まった柱と照らし合わせながら話し合いをすること、ヒアリング調査について小委員会で整理した結果から調査内容・調査方法・ペアの組み方等を改めて皆様に議論する。その後ヒアリング調査を実施し、第4回定例会でヒアリング調査の結果を「テーマ絞り込み等」と一緒に協議の方が現実的であると思う。8月の第2回小委員会では、ヒアリング調査に関して内容や実施方法等を協議し、第3回定例会で提案することを一任いただくことでよろしいか。

(議長) 小委員会で具体例を協議することと、スケジュールを後ろに下げることがご理解いただきたい。では、皆様に了承いただいたということで、第2回小委員会で整理して、まずはアンケート調査を先に進める。ヒアリング調査は骨組みを少し拵えて皆様に照会をする。

次回小委員会の日程は決まっているか。

(事務局) 次回小委員会は8月17日(水)午前10時から開催予定。小委員会の皆様には、後日開催通知を送付する。

#### 4 その他

##### (1) 図書館協議会への派遣について

標記協議会への委員派遣について協議し、金子委員を派遣することとなった。

##### (2) 報告事項

議長が出席した会議について資料を基に報告を行った。

##### (3) 神奈川県社会教育委員連絡協議会研修会について

標記研修会への委員派遣について協議し、海野委員を派遣することとなった。

古矢議長のあいさつにより、会議を終了した。

以上

令和4年度 第1回社会教育委員会議定例会出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備 考	出欠席
1	小泉 勇	相模原市立小学校長会		出席
2	金子 友枝	相模原市文化協会		出席
3	小泉 喜亮	相模原市PTA連絡協議会		出席
4	大谷 政道	相模原市公民館連絡協議会	副議長、 小委員会 委員長	出席
5	安西 信行	相模原市青少年関係団体連絡会		出席
6	大橋 千景	虹のおはなし会		出席
7	若林 由美	一般社団法人星と虹色なこどもたち		出席
8	石川 利江	学識経験者（桜美林大学教授）		出席
9	秦野 玲子	学識経験者（RE Learning代表）	小委員会 委員長	出席
10	古矢 鉄矢	学識経験者（学校法人北里研究所参与）	議長	出席
11	小林 政美	学識経験者（特定非営利活動法人男女共同参画 さがみはら 副代表理事）		出席
12	海野 浩	公募		出席
13	水谷 英正	公募		出席
14	雨宮 健一郎	特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク		出席